

アーティストによる美術史講座

第4回 ゲスト：森村泰昌編 レポート

2022年4月17日（日）14:00-16:00

オンライン実施

ゲストに森村泰昌さんを迎え、30年以上続けているセルフポートレート作品を芸術の世界に入る手立てとして捉えた「試論」を展開していただきました。

森村さんは1985年以来、「なにものかになった自分の写真を撮影する」ポートレート作品を制作してきました。ゴッホ、フリーダ・カーロ、レンブラントなど、さまざまな作家の肖像画や作品のなかの人物になり、実際の作品とそっくり同じしつらえを実際に制作し、作品と同じ構図で写真を撮ってきました（図1）。この表現を30年以上続けることができているのは、さまざまな要素が関係していますが、3つのテーマで解きほぐし『「なる」美術史・試論～なってみて、わかること～』と題し、論じていきました。

1. ひとり遊びの世界

子どもの頃は多くの人が没頭していた「ひとり遊び」も、大人になるにつれ「卒業」していかなければいけません。「大人」は社会で何かしらの役割を担い、ネットワークを作り、社会を構築する存在です。自分の頭の中で妄想を繰り広げたり、自分の世界で完結するような「ひとり遊び」は、社会を構成する大人にはふさわしくないとと言えます。しかし、一部の大人は子どもの頃をひきずり、その気持ちを持ったままです。そうした大人は社会に適合しにくいようにみえますが、「芸術の世界」では彼らを受け入れることができます。

画家や小説家などの創作者たちは、白いキャンバスや白い紙に一人向き合っ、頭の中で妄想や想像を広げていきます。そうした姿は、「ひとり遊び」をしている様子と似ていて、創作活動は「ひとり遊び」の延長線上にあると言ってもいいかもしれません。一方で、「ひとり遊び」と異なるのは、作品として発表することと、誰かにみられる、という点です。みる人がいるということは、その人たちの心や思考を動かしたり、あるいは彼らから創作者側への働きかけも起こったりします。自分一人の世界で

は完結しない、社会との関わり、「社会性」が生まれます。「ひとり遊び」をこどもの世界と考えると、「社会性」は大人の世界です。この2つをつなげることができるのが「芸術の世界」です。森村さんの「なにものかになった自分の写真を撮影する」ポートレート作品は、森村さんにとって「究極のひとり遊び」ですが、作品として発表することによって「社会性」を帯び、ただの「ひとり遊び」では終わらない、芸術としての存在感を得ることになります。



図1（動画よりキャプチャ）

2. 第4の扉

「芸術の世界」は気軽に誰しもの入ることができる世界なのでしょうか。森村さんは、その入り口は次の3つしかないと考えています。

- ① 作る＝作品制作
- ② みる＝美術鑑賞
- ③ 知る＝美術研究

高校1年生のときに美術クラブに入った森村さんは、そこで初めて油絵と出会い、夢中で制作をしていきますが（作る）、スランプに陥ったときに同級生や先輩の作品を見渡し、美術館にもいくようになります（みる）。当時、フォーヴィスムのような画風で描いていた森村さんですが、その後の近現代絵画になると「わからない」と感じてしまい、そのために本から知識を得ようとしてきました（知る）。しかし、知識を得れば得るほど、そもそも絵画とは、美術とは、芸術とはといった本質的な部分がみえてきて、わかる以上にわからないことが増えていきました。

結果として、「作る」「みる」「知る」という3つの方法を全て試していったにも関わらず「芸術の世界」には入ることができませんでした。何度もこの3つを繰り返し、「芸術の世界」の周りをぐるぐるとまわるといふスパイラルが30代半ばまで続き、森村さんがたどりついたのは、「自分で入り口をつくる」という選択でした。

例えば、絵画と文学を融合させた絵本に取り組んだこともありました。また写真を使った表現もいろいろ試しましたが、アンリ・カルティエ・ブレッソンのように「撮る」ことが「芸術の世界」への入り口とはならず、結局森村さんがたどり着いたのは、「作る」でも「みる」でも「知る」でもない、第四の入り口としての「なる」という手法なのでした。

まず、「なる」対象をよくみることから始まります。事細かにじっくりと観察し、何が表現されているのか、どのような技法が使われているのか、制作背景はどのようなものか、作家の考えや他の作品についてなど詳しく調べていきます。そうしてわかった事柄を踏まえて、制作につづります。このプロセスからは、最初にあげた3つの入り口である「作る」「みる」「知る」が「なる」過程上に生じていることがわかります。3つの扉を一斉に開くことによって、「芸術の世界」への入り口が開く装置、アプリのようなものが、「なる」という4つ目の扉です。

3. なってみて、わかること

「なる」前にはわからなかったことが、「なる」ことでわかることは、自分自身のいるステージが変わるようなことで、そこに面白さや刺激が生じます。では、何がわかるのでしょうか。「なる」対象によって様々に異なりますが、フェルメールの作品の一つ《牛乳を注ぐ女》（図2）になったことを例にみていきます。

《牛乳を注ぐ女》は風俗画の一種ですが、描かれているものに様々な寓意が込められ、絵解きとしての面白さも

持っています。しかし「なる」ということを大きな目的とする場合、何がどのように描かれているのか、時代背景や作家の特徴といったことに焦点がしぼられます。多くの研究論文などの資料を参考にしたとき、特に気になったのは遠近法の表現でした。写實的に描かれているようにみえますが、専門家は窓際に置かれたテーブルだけ遠近感が崩れていると指摘します。テーブルの手前のラインを基準とするとかなり小さなテーブルになり、側面のラインを基準とすると横長のテーブルになってしまいます。しかし、ここであえて遠近法を無視する大胆不敵さによって、女性の存在感が増し、非現実感を演出し、単なる風俗画とは一線を画した作品となっていると解説されています。

当初、そうした解説に納得して、遠近法が崩れたテーブルを用意するつもりでしたが、さらに詳しく作品をみていくと遠近法が崩れていなかったことがわかります。作品を拡大して観察したときに、テーブルの奥のラインが描かれていることに気づき、その線をたどっていくと遠近法に則って描かれた六角形のテーブルがみえてきました（図3）。四角形のテーブルだという思い込みが、遠近法を崩しているという判断をさせていたのです。他のフェルメール作品を調べてみると、同じような六角形のテーブルが描かれている作品がいくつか見つかりました。



図2（森村さんの作品、動画よりキャプチャ）

「なる」というのは、作中の人物に「なる」のではなく、作品（この場合では絵）に「なる」ということです。そのために、フェルメールが描いた部屋を現実につくり、描かれているものも形や素材などを調べて実際に制作しました（図4）。部屋をつくってみると、飾り気のない寂しい様子がよくわかります。壁から30cmほどしか離れていない位置に画家の視点があることもわかりました。テーブルも女性も画家自身も部屋の端に寄って描かれていたことになりませんが、そうした視点によって「輝かしい」世界が立ち上がっています。

フェルメールの時代、画家は職人という認識の方が強く、3次元の世界を2次元の世界で表す技術職として、遠近法に従って描くことは一種のルールとも言えました。その中で、イレギュラーな形状のテーブルを、あたかも四角形のテーブルであるかのように描き、遠近法が崩れてみえるように描いたことは、遠近法に囚われない表現をいかにして実現させるか（ルールを破らずに）ということに挑戦したようにもみえます。画面右下に置かれた足温器の側面のラインと、テーブルの側面のラインが平行であることによって（図5）テーブルが四角形だと錯覚してしまうところにも、フェルメールの魔術的な企みを感じます。

魔術的な部分は他にもあります。背景の壁の右側には、ほうきなどが下がっていますが、それらをつなげていくと窓から差し込む光のラインと重なる左から右へ斜めに下がる直線がみえてきます。また、女性の顔は注がれる牛乳に向いていますが、そのまま下のパンまで斜めに一直線でつなげることができます。この2つの線は牛乳が入っているツボを中心に対角線状にクロスし、このツボを絵の中心として強調させています（図5）。実際、森村さんが写真を撮る時にも、これらのラインがツボを中心にクロスする位置になるように調整し、撮影しています。

こうした「なる」プロセスのなかで、研究者とは全く違うアプローチから作品や作家についてわかることがあり、なってみることの面白さがあります。ただし、その面白さは「なる」対象によって全く異なり、ゴッホに「なる」ときではまた別の面白さや刺激があります。そこに30年以上継続してきた要因があるのではと考えています。

今回のレクチャーは「試論」でしたが、これをさまざまな「なる」セルフポートレート作品で重ねていくことで、「本論」として展覧会や書籍といったかたちで発表できるのではないかと森村さんは今後について話されていました。

「芸術の世界」に入るための「第4の扉」としての「なる」というアプローチは、誰にでもできるものではありませんが、自分にとっての入り口を探る、という姿勢はわたしたちに新しい考え方を投げかけてくれました。

（レポート松村淳子）

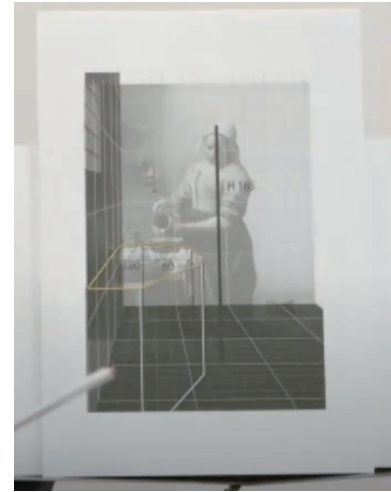


図3（動画よりキャプチャ）



図4（動画よりキャプチャ）

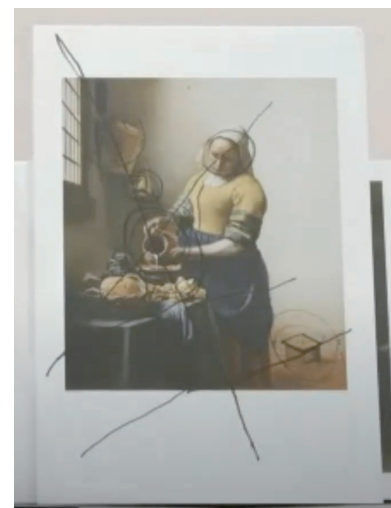


図5（動画よりキャプチャ）